

瓦の様相から見た古代山城

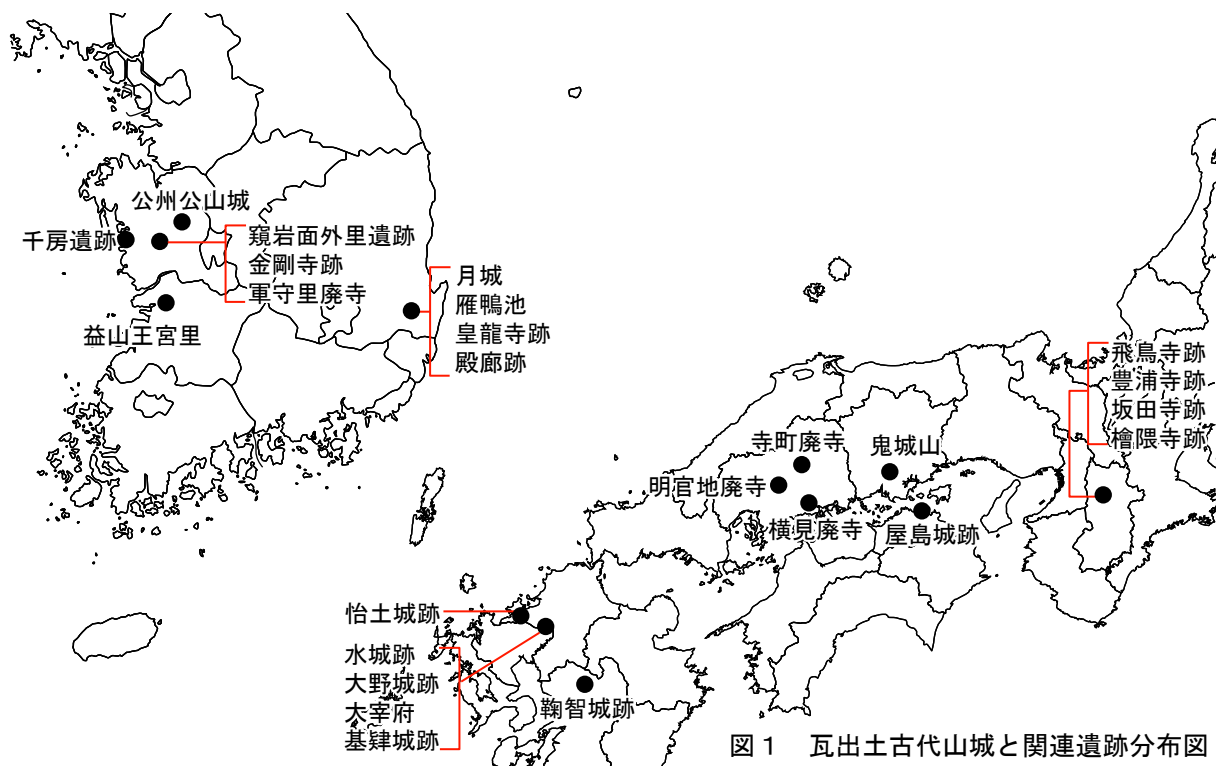
中山 圭（天草市観光文化部）

はじめに

現在、我が国における古代山城は、文献に記載のある朝鮮式山城と記録に見られない神籠石系山城に大きく峻別されるが、それらを合計しても 30 遺跡に満たない数しかない。さらに、その中でも神籠石系山城は、列石・土塁線や門跡等防衛遺構は見られるが、城内の削平がなされず生活痕跡がほとんど判明していないものが大多数を占める。また、朝鮮式山城でも、城内での生活遺構が顕著に見られないもの、外郭線中心の調査が主体で城内区画に調査が及んでいないものが見られる。古代山城は、多くが国指定史跡以上の文化財指定を受け、保護の対象になっていることから、短期間に広範な発掘調査が実施されることも皆無に近い。このため、各城跡からの出土遺物は限定的で、現在も個別の城郭の築城・存続年代に多様な見解が見られている。

このような与条件の中で、本稿に課せられた役割は「古代山城出土瓦の分析から、遺跡の姿の一端を明らかにすること」であろうかと思う。現在、古代山城どころか、一片の古代布目瓦すら出土したことがない自治体に奉職し、瓦研究から遠ざかっている筆者にはいささか荷の勝ちすぎる課題であるが、若干の検討を行ってみたい。

我が国における屋瓦の導入は、周知のとおり、崇峻天皇元年（588）に百済から 4 人の瓦博士が来日したことに端を発する。大和飛鳥寺等の初期寺院に国産瓦が葺かれたが、そ



これらの屋瓦の軒丸瓦の文様と、ほぼ同じものが百済でも出土していることから、記録の正確性が証明され、朝鮮半島と我が国の文化交流を示す遺物として認識されている。以後、瓦は主に寺院建築で利用され、畿内地方を中心に次第に地方へ拡散していった。

一方、朝鮮半島と海を挟んで対峙し、文化流入の窓口であった九州では、畿内への瓦導入とは別ルートで、直接6世紀後半から瓦作りが伝わっている。しかし、本格的な屋瓦利用までは、なお時間を要し、7世紀中葉の寺院建立まで待たねばならなかった。ほどなく九州は対外緊張関係の渦中におかれ、白村江の役を経て、防人・烽・大宰府・山城が急速に整備されることとなった。これに伴って、瓦生産が本格化されたと見られる（齋部1999）。国土防衛のために相次いで築城された古代山城の中で、屋瓦を利用した山城は限られており、中心は大宰府を取り巻く、筑前大野城や基肄城、南へ約70km隔たった鞠智城等である。これらの城郭は、継続的に城内に建物が構築され、それに付随して瓦類も使用されている。

山城から量的には数多く出土する瓦類の中で、主に研究に供される軒瓦や道具瓦のバリエーションは決して豊富とはいえない。瓦からの立論は限定された資料によらざるを得ないため脆弱な考察となり、今後の数点の新資料の発見により大きく結論が変容する危うさを内包していることをご了知願いたい。反面、出土資料の通覧には適しているといえようか。まずは、古代山城出土の瓦類を整理することから始めたい。

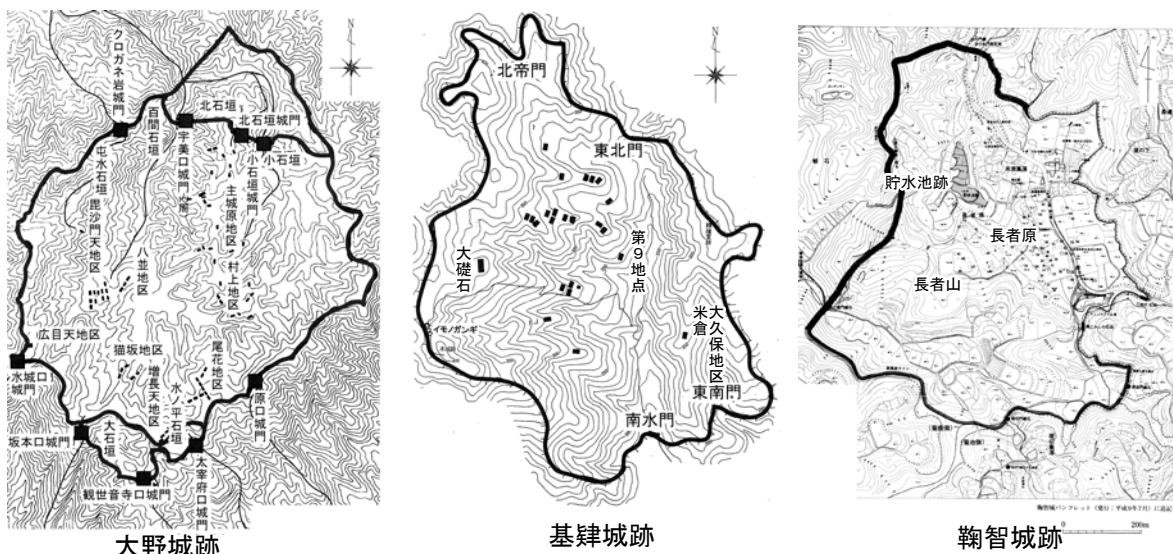


図2 北部九州3城 史跡範囲図

1 古代山城から出土した瓦

(1) 大野城跡出土瓦

大野城跡は、福岡平野南端の四王寺山塊に立地する古代山城で、大宰府政庁の北後背を防衛する役割を担っていた。『日本書紀』天智4年（665）の記録から、基肄城・長門城と共に築城され、その普請には、百済高官であった憶礼福留・四比福夫が関わっていることが知られる。城域の総延長は約6.5kmで、古代山城の中でも最大級の規模を誇り、内部施設も70余棟を誇る建物跡など数多く存在する。これまで九州歴史資料館を主体として50以上に及ぶ発掘調査が行われ、古代山城普請の特性を示す様々な調査成果が得られている。

古代瓦は、城内に散在する建物跡各所から出土が見られ、各城門からも出土する。昭和 50 年の八ッ並地区礎石群の調査で 1 点（福岡県教委 1976）、昭和 53 年の主城原地区礎石群での発掘調査で複数、軒瓦が出土している。図 3-1～3-6 に図示した瓦群は主城原地区の調査で出土した瓦で、素弁軒丸瓦 4 種類 14 点、複弁軒丸瓦 2 種類 5 点の他、瓦当と接合するための刻みを有する丸瓦片なども報告されている（福岡県教委 1979）。

4 種類の素弁軒丸瓦瓦当は、蓮華内に一筋の稜軸を持ち、大きな中房とその中房まで達する間弁が特徴的な素弁八葉のⅠ類（図 3-1）、隅丸三角形の弁形で中房と弁が未接続で、離隔している点が特徴的で、周縁は二重圈線を呈するⅡ類（図 3-2）、Ⅱ類に似るがより間弁が大きく弁に立体感があるⅢ類（図 3-3）、文様は不明瞭ながら中房径が小さく高く突出するⅣ類（図 3-4）、であり、このうちⅠ類は大宰府 033 型式、Ⅱ・Ⅲ類は大宰府 020A と型式設定され、日吉地区などの大宰府史跡での出土が見られる。八ッ並地区での出土例もⅢ類と見られる。Ⅳ類は文様が定かでないものの、高く小さい中房・1+4 の蓮子配置・粘土紐成形によるいびつな周縁などから素弁八葉有軸の大宰府 032 型式と考えられる（栗原 1998）。複弁の 2 種は、いわゆる老司式と鴻臚館式と見られるようであり、明らかに老司Ⅰ式とわかるものが 1 点ある（図 3-5）。

瓦当と接合する刻みを持つ丸瓦（図 3-6）は、Ⅰ類瓦当（033 型式）の上半部に被されるように使用されたと考えられる。図版から、ヘラによる斜線キズが丸瓦凹面だけでなく、丸瓦側端部にも施されていることが窺え、下半部のみ周縁を有する瓦当と組み合わせることが想定される。

昭和 60 年から 63 年までの 4 年間で実施された大宰府口城門の調査では、老司式風で、大宰府 290 A 型式とされる図 3-7、鴻臚館式軒丸瓦である図 3-8、さらに大宰府式鬼瓦（図 3-9）5 個体以上が出土しており、城門が 8 世紀前半頃に瓦葺構造に整備されたことが判明している（福岡県教委 1991）。迫力ある憤怒相の鬼面文が遍く知られるこの大宰府式鬼瓦は、統一新羅の鬼瓦の影響を受けて成立し、大宰府政庁跡や水城などの大宰府史跡の他、怡土城跡などでも出土が見られること、主に鴻臚館式軒丸瓦とともに葺を荘厳したことなどが知られる。城門における瓦出土は、城門建築物の堅牢性強化、防火能力の向上などを目的とした城郭整備の実状を如実に示しているが、大宰府式鬼瓦の採用からはさらに、軍事拠点としての来城者への威厳誇示（井形 2003）や辟邪概念の重視等の意図が推量されよう。

平成 15 年 7 月には集中豪雨により、城内多数地点で災害が発生した。近年は、この災害に伴う復旧事業により発掘調査が進み、数多くの知見が得られている（福岡県教委 2010）。土塁や石垣など外郭線の被害箇所が多く、調査により新たな城門が 4 か所発見され、従来の城門数から倍増している。一連の調査の中で瓦類も数多く出土が見られるが、特徴ある軒瓦は平成 19 年に実施された主城原地区礎石の東側斜面崩落箇所において、素弁軒丸瓦、いわゆる百済系単弁の系統とされる軒丸瓦が 3 点報告されている（福岡県教委 2010）。災害復旧に伴う発掘調査で出土した瓦類を整理した齋部麻矢氏は、この 3 点を、それぞれ 020Aa 型式、020Ab 型式、020C 型式と分類し、軟質で黄灰色であることを示している（齋部 2010）。図版では比較的残りの良い 020Ab 型式を図 3-10 として図示した。また、主城原地区の調査で出土した、広端部に粘土板を重ね付けして厚く作る平瓦を紹介し、020 型式や 033 型式などの軒丸瓦とセットとなる軒平瓦であった可能性を指摘して

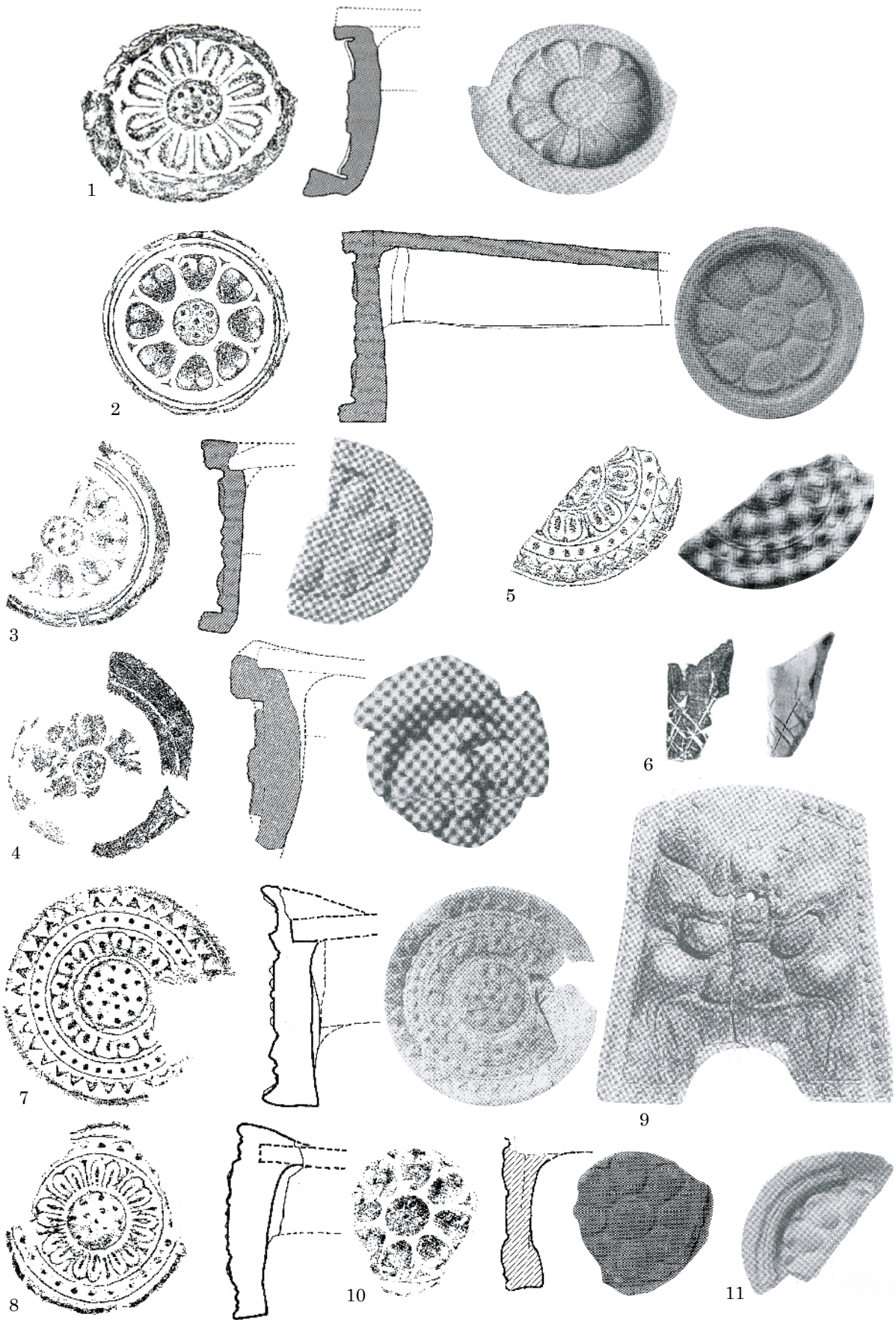


図3 大野城跡出土の瓦（実測図 1/5 写真任意縮尺）

0 10cm

いる。

さらに城域北部の西側で発見されたクロガネ岩城門からも 020 型式軒丸瓦（図 3－11）が出土している（九州歴史資料館編 2015）。図録写真から、この種の瓦では珍しく灰色の焼成色を呈し、周縁の二重圈線のさらに外側に素文の周縁が見られる。あたかも周縁が、内区の二重圈線・外区の素文帯に区分されているように看取されるが、032 型式・033 型式など大宰府史跡の初期瓦は概して周縁の手作り感が強く、粗放な製作例が多い。それと同様に捉えられるものであろうか。出土状況、城門瓦葺きの有無も含めて、正式な報告が待たれる。

以上のように、大野城跡では主城原地区を中心に、020 型式に代表される「かえり弁」軒丸瓦瓦当と 033 型式に代表される「鎬弁（有稜）」軒丸瓦瓦当が出土しているのが特徴で、この 2 系統の瓦当文様はそのまま、大宰府史跡全体の初期瓦の文様構成と適合する。いずれの系統も大宰府史跡で最古級の瓦であることは概ね認知されているところであるが、栗原和彦氏は百済系文様であるかえり弁軒丸瓦を最も古いとした上で、鎬弁軒丸瓦は新羅瓦を模倣して製作され、大宰府導入時期を天武・持統期として、両者に若干の時期差を想定している（栗原 2001）。

（2）基肄城跡出土瓦

基肄城跡は、佐賀県三養基郡基山町に所在する朝鮮式山城で、天智 4 年に大野城とともに築城されている。大宰府の北を守護する大野城に対し、南側の守備を受け持つと考えられる城郭である。

大野城跡や鞠智城跡に比べ、発掘調査が進んでいないため、未解明の点も多いが、建物跡は 40 棟を数え、その付近には多量の瓦が散布している。昭和 52 年の調査報告書に採集瓦を含めた報告がなされており、それに基づいて概要を記す（基山町教委 1977）。

図 4－1 は、「大礎石群」（北帝地区Ⅲ群 1 号建物）付近で採集され、広く周知されているかえり弁八葉軒丸瓦である。蓮華文は弁端付近で反転し、反転部のみ稜が入る。このため、弁端部は碇状の線形に見える。中房は大きく、1＋6 の蓮子を配している。中房周囲は凹線が彫られ、弁と中房は隔絶している。小田富士雄氏が設定した「百済系単弁軒丸瓦」の最古例であり、基肄城創建段階の瓦と考えられている。図 4－2 は、城内採集の三重弧文軒平瓦で、凸面側には、平瓦部から顎部まで密な斜格子叩文が施されている。図 4－3 は昭和 51 年の発掘調査により全面発掘された第 9 地点の礎石建物跡付近で出土した軒丸瓦で、図 4－1 と同文様である。周縁が残存しており、二重圈線であることが判明する。図 4－4 は同じく第 9 地点で出土した三重弧文軒平瓦。やはり、顎部には格子叩きがなされている。図 4－5 は伝城内出土の複弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に殊文、外区外縁には外向鋸歯文が見られる。大野城跡でも出土している大宰府 290A 型式に該当すると思われる。図 4－6 は、素弁二十葉軒丸瓦で、外区内縁は 23 個の殊文、外区外縁は外向鋸歯文で飾られる。基肄城に供給した高崖瓦窯跡で出土したものとされる。

その後、平成 15～18 年にかけて基山町教育委員会により、建物跡所在確認調査が実施された。15 箱に及ぶ瓦類が出土・採集され、この成果品も近年公表されている（小田 2011a）。出土地点を明記していない資料は、採集品と思われる。図 4－7 は平成 18 年の調査で大久保地区の No. 1 トレンチから出土した百済系単弁軒丸瓦である。図 4－1 など

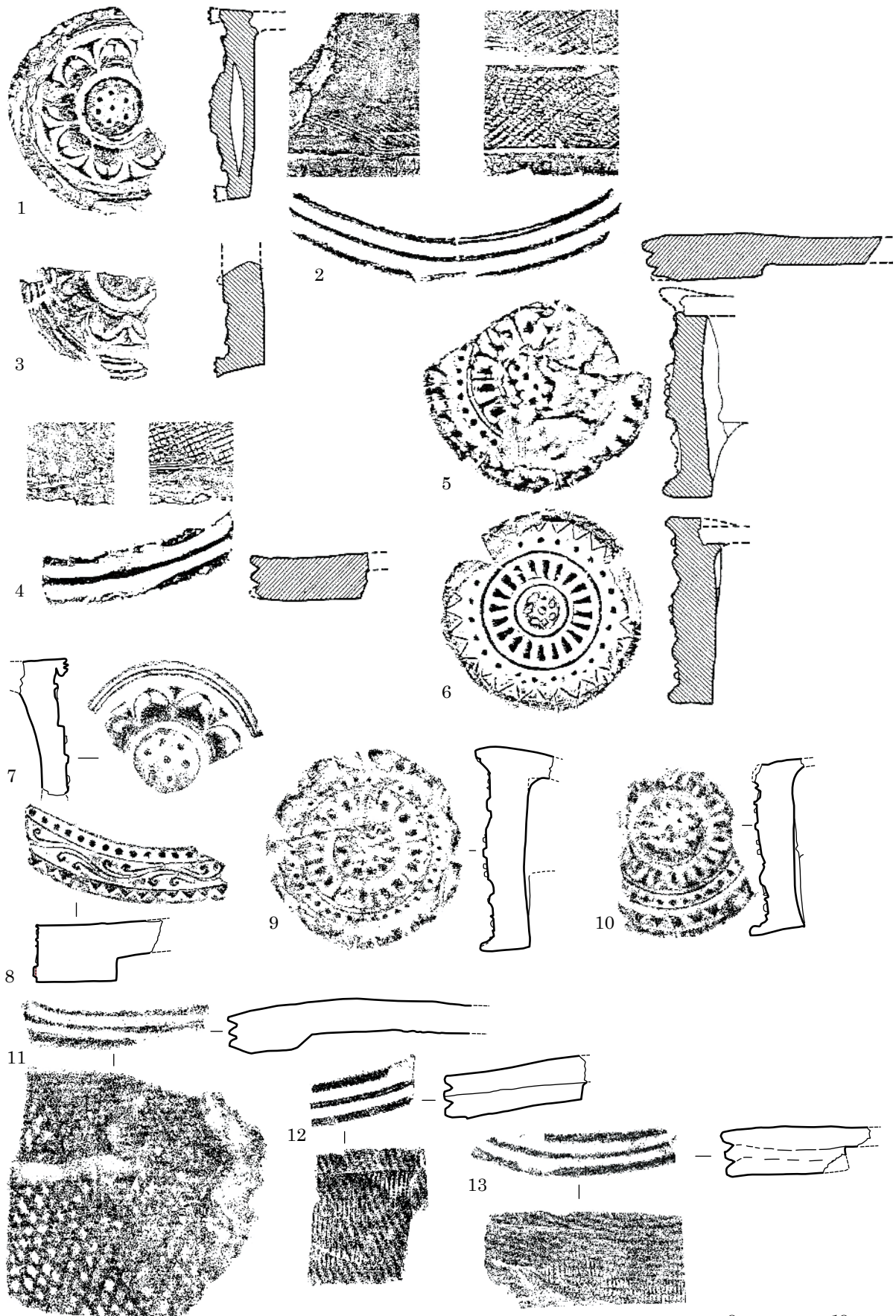


図4 基肄城跡出土の瓦 (実測図 1/5)

と同文。図4-8は、平成15年に東北門跡南側のNo.7Aトレンチで出土した老司Ⅱ式軒平瓦である。扁行する蕨手文の巻き方から、大宰府560Bb型式の可能性が高い。基山町立歴史民俗資料館収蔵品に、同型の老司Ⅱ式軒平瓦で、昭和57年に城内南側の「米倉」から出土したことが注記されたものもある。図4-9、4-10は複弁の軒丸瓦で、図4-5と同じく大宰府290A型式である。図4-11～13は、三重弧文軒平瓦で、それぞれ顎部の叩き文が異なり、4-11は斜格子、4-12は平行、4-13は長方形叩きである。

基肄城跡から出土している瓦から、築城後の7世紀段階では、百済系単弁軒丸瓦と三重弧文軒平瓦のセットが使用され、8世紀前半には複弁の290A軒丸瓦と偏向蕨手文の560B軒平瓦のセットが主流となったものと想定される。現時点までの出土・採集瓦からは、軒瓦のバリエーションは比較的単純であった可能性が指摘できよう。後者のセットは、小田富士雄氏が「政庁Ⅲ式」とした組み合わせで（小田2011b）、大宰府政庁で普遍的に見られる軒丸瓦と軒平瓦のセットと考えられている。

（3）鞠智城跡出土瓦

鞠智城跡は、熊本県北部の山鹿市・菊池市にまたがって立地する古代山城で、この種の遺跡としては最南にある点が特徴である。とはいえ、広大な熊本平野においては最北部にあたる丘陵に位置するため、南側の懐は深いといえる。鞠智城は築城記事は見られないものの、『続日本紀』文武天皇2年（698）に大野城・基肄城とともに「繕治」された記録があることから、両城からやや遅れて築城されたと考えられている。古代山城の中で数少ない「長く維持管理が続けられた城郭」であり、そのために遺構・遺物の出土量は豊富である。城内中央の長者原地区・長者山地区を中心に72棟の建物跡がこれまで検出されている。熊本県教育委員会により継続的に発掘調査が行われ、その焦点が外郭線の防御施設より、内部の建物跡の検出に置かれたため、大野城跡や基肄城跡に比べ、掘立柱建物跡の検出数が多い。

鞠智城跡における古瓦は、黎明期の発掘調査以後、各所で出土している。従来出土状況としては、平瓦の出土が多く、その凸面二次調整に個性的な特徴が見られる資料が多い。特に、平瓦成形用桶の回転を利用して二次調整を行った太形凹線文平瓦は、国内他遺跡での出土例があまり知られない。

軒丸瓦は、まず第5次調査と第13次調査において、瓦当小片資料が出土し（図5-1・5-2）、八葉蓮華文で百済系の瓦であろうことが確認された。平成8年の第18次調査、平成9年の19次調査で、長者原地区北側を中心とした発掘が進展し、56・59・64号建物跡の周辺からそれぞれ軒丸瓦と接合丸瓦が出土している。このうち、64号建物跡の周溝からは文様全容が窺える八葉蓮華文瓦当が出土している（図5-3）。この瓦当は、蓮弁中央に丸くやや幅のある稜を持ち、稜を境に弁左右が各々匙状に凹む。蓮弁断面はw字状となる。全体的に弁は湾曲しており、弁端は強く反転する。高く作られる中房には1+6の蓮子を配し、中房と蓮弁は断面凹形の圈溝で区画されており連続していない。間弁は楔形で、中房に向かって蓮弁の中程で途切れている。胎土には砂粒が多く含まれ、原材料粘土に意図的に混和剤として砂が配合されたことがうかがえる。中房部分で4.4cmと厚みを持って作られている。

この長者原地区での一連の調査では、丸瓦の凹面広端側に接合キズや補強粘土が見られ

る資料も数多く発見されたことから（図 5－4～6）、鞠智城跡の軒丸瓦が、原則、瓦当の上部に丸瓦を被せるように接合する技法を採用していたことが判明している。

その後、長者原地区北側の貯水池跡の発掘調査が進められ、様々な遺物が出土することとなった。瓦類も貯水池跡から良好な残存状況のものが出土している。貯水池跡の第 28 トレンチからは、8 層から完形の軒丸瓦瓦当（図 5－7）、9 層から完形の接合丸瓦（図 6－1）、11 層から斜格子目の接合刻みを持った接合丸瓦（図 6－2）が出土している。図 6－3、6－4 も貯水池跡から出土した軒丸瓦瓦当である。

第 22 次調査において完形瓦当図 5－7 が出土したことは、図 5－3 出土段階で不明瞭であった部分を補完することとなった。すなわち周縁が、下半部のみ成形されている様子が明瞭になったのである。この周縁は、素文で平坦であり、一般的な軒丸瓦の周縁のように突出していない点に、独自性が認められる。文様は、図 5－3 と同範であるが、厚みは比較してやや薄く、胎土も精選され、大きな砂粒は見られない点などに相違がある。

鞠智城跡で出土する軒丸瓦瓦当はすべて同類の文様である。瓦当には小破片もあって厳密には証明できないが、各資料を検討した結果、基本的には同範であると確認している（中山 2005）。丸瓦も、凹面側に接合キズを有するもの以外には、瓦当との接点を残す資料がないので、接合技法も全て同じ様式である（中山 2008）。瓦当文様は、詳細は後述するが、大宰府史跡 032 型式・033 型式に類似していることから、7 世紀後半と考えられる古風なモチーフといえよう。また、接合技法は、その 033 型式、あるいは古新羅系六葉素弁軒丸瓦である大宰府 030 型式（図 7－8）の技法と近い。この接合方式は、朝鮮半島（百済・新羅）では、比較的普遍的な接合技法であるが、国内では類例が乏しい技法と言える（亀田 2000・戸田 2004）。このことから、鞠智城において使用された瓦に関する製作体制は、築城段階に近い時期から、単一瓦範と単一接合技法を有する小規模な瓦工グループが生産し、継続的に供給を続けたのではないかと想定している。

ただし、長者山地区礎石群では、鞠智城ではあまりポピュラーでない縄目叩きや有段式丸瓦が出土しているため、この地区では 8 世紀以降に新式の瓦類を導入していた可能性がある。

（4）その他の山城の出土瓦

福岡県太宰府市・大野城市にまたがる水城跡は、天智 3 年（664）、朝鮮式山城に先んじて築造された防御施設である。福岡平野と筑紫平野の結節部となる二日市地峡帯に構築された平野部関門で、大宰府への侵入を遮断する防壁とするため、巨大な濠と土塁によって形成されている。土塁に穿たれた東西両門を中心に、多様な瓦が出土しており、軒瓦の種類は軒丸瓦 10 型式 14 種類・軒平瓦 13 型式 16 種類にも及んでいる（九州歴史資料館 2009）。主要な瓦は、鴻臚館 I 式軒丸瓦（大宰府 223 型式）と均整唐草文軒平瓦（635 型式）の組み合わせであり、8 世紀前半における大宰府政庁の本格的な屋瓦導入と時を同じくして、水城も瓦葺建築物が採用されたと考えられている。軒丸瓦の出土数は、西門出土数が 6 割を超えており、門の重要性がうかがえる。また、大宰府式鬼瓦も出土し、大宰府の玄関口として威容を誇っていたのであろう。現在のところ、他の大宰府史跡のように、初期瓦（かえり弁軒丸瓦・鎚弁軒丸瓦）は出土していないようである。

香川県高松市の屋島城は天智 6 年（667）に、高安城・金田城とともに築城された記録

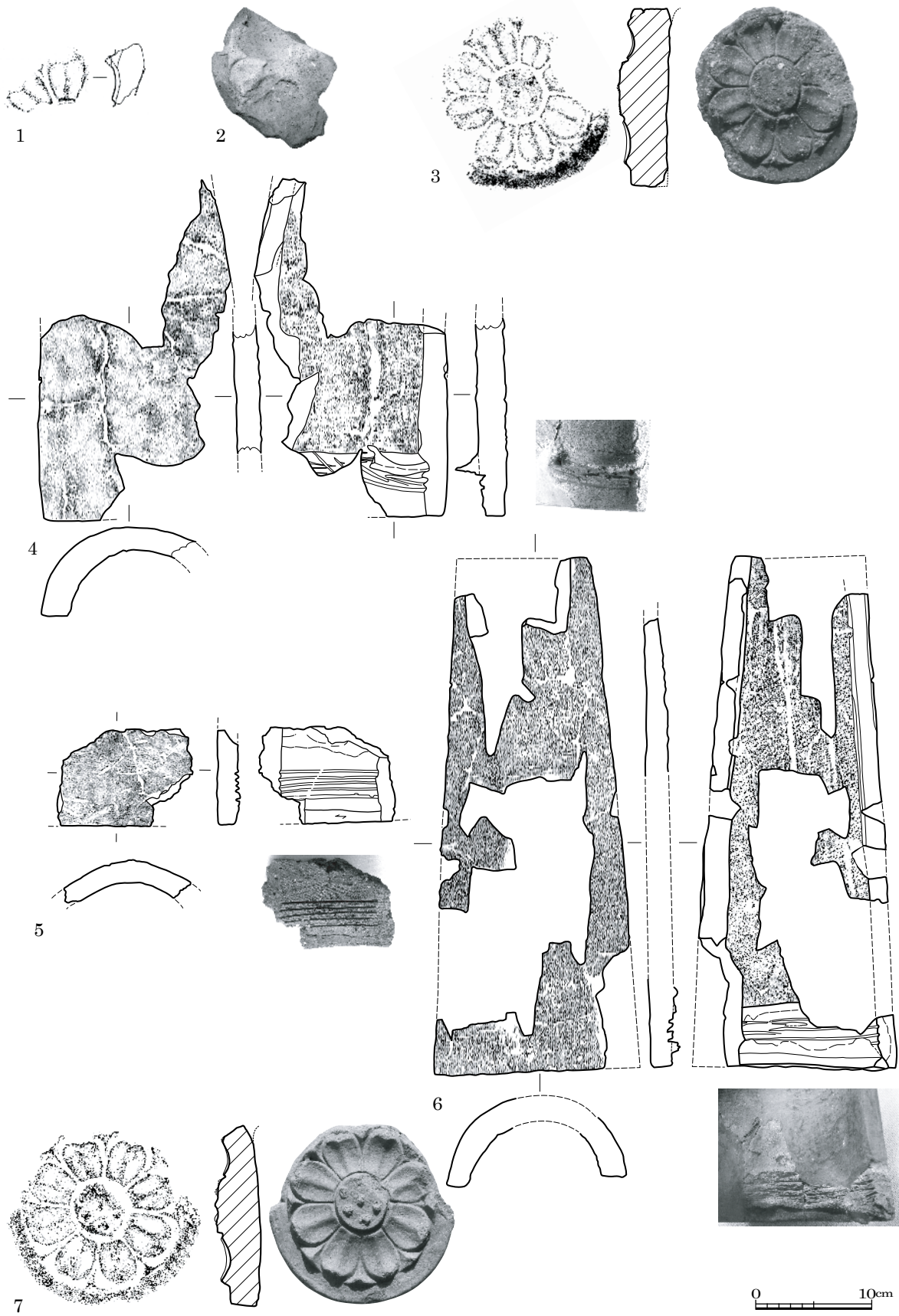


図5 鞠智城跡出土の瓦（実測図 1/5 写真縮尺任意）

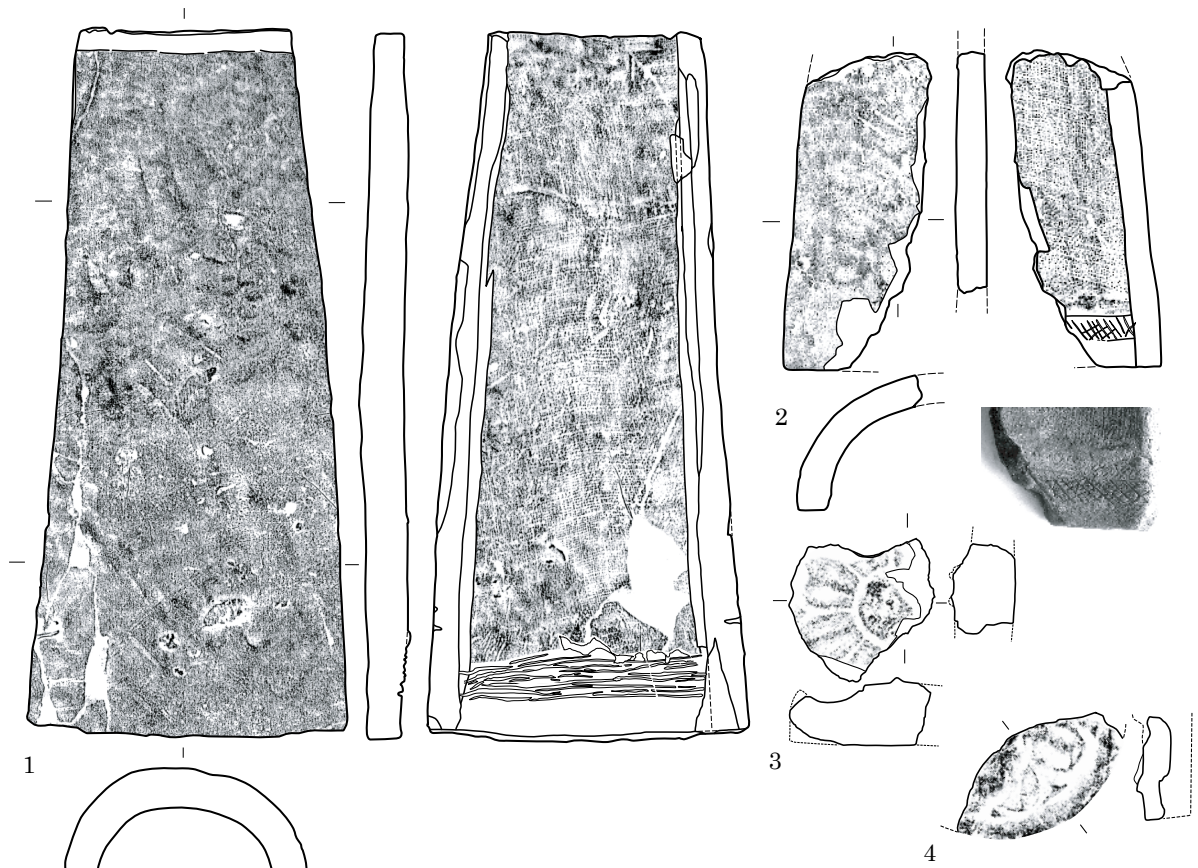


図6 鞠智城跡出土の瓦（実測図 1/5 写真縮尺任意）

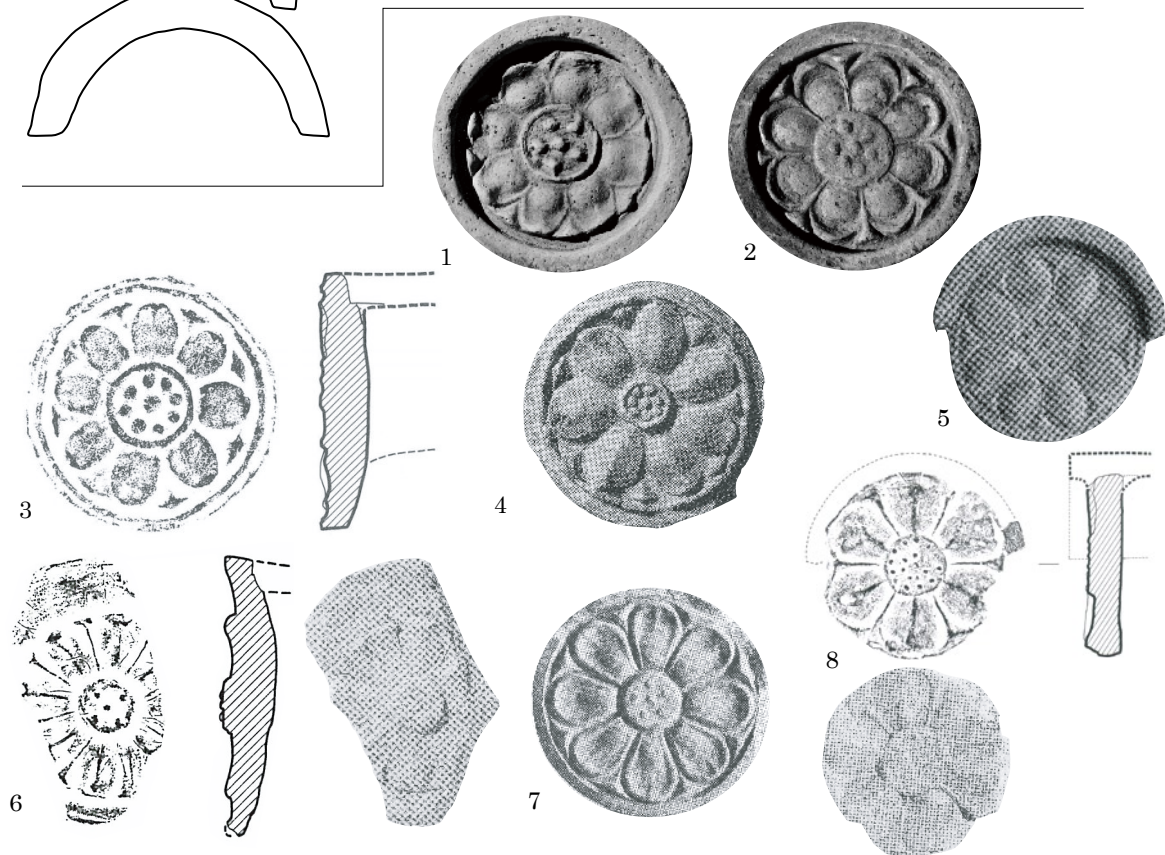


図7 各地遺跡の関連瓦（縮尺任意）

の残る朝鮮式山城である。高松市教育委員会による調査では、礎石建物跡西の集石遺構から縄目叩きの平瓦が出土しているようである。また、貯水池推定地のトレンチ6層からは、複弁八葉蓮華文軒丸瓦の瓦当と縄目叩きの丸瓦・平瓦が出土しているが、13世紀代の屋島寺に関する瓦類と報告されている（高松市教委 2003）。

岡山県総社市の鬼城山では、城内中央で建物跡が集中するⅡ区から縄目叩き平瓦や玉縁式丸瓦などが出土しており（岡山県文化財保護協会 2013）、建物が瓦葺きであった可能性は高い。軒瓦などは出土していないようで、屋瓦の詳細は不明という他はないが、今後の調査による出土の期待がかかる。

福岡県糸島市に所在する怡土城は、『続日本紀』によると天平勝宝8年（756）から神護景雲2年（768）までの12年の歳月を費やして築城された。普請を司った吉備真備は、遣唐使を務めるなど唐に精通し、その縄張りは高祖山の山頂から麓の平野部まで取り込み、国内山城としては前例のないプランであったことから中国式山城と呼ばれている。瓦類は、城内各所から多量に出土しているが、軒瓦の出土例は多くなく、昭和12年に鏡山猛氏が報告している鴻臚館系軒丸瓦などに限られているようである（鏡山 1937）。大宰府式鬼瓦の出土は広く知られ、鏡山報文にも完形の資料が掲載されている他、数例の伝世品があり、また破片資料ながら実際の発掘調査でも出土している（前原市教委 2006）。大宰府式鬼瓦は、8世紀前半～中葉にかけて大宰府管轄下の城郭に相次いで導入された。城郭における瓦導入が、単に建物建材としての目的でなかったことが読み取れよう。

2 古代山城出土の初期古瓦の系譜について

古代山城の瓦出土量は、概ね城内に存在する建物跡の数によって左右され、現在までのところ、大野城跡・基肄城跡・鞠智城跡の北部九州三城で比較的多く出土している状況を前章において確認した。大野城跡・基肄城跡では、8世紀以降大宰府系の瓦を採用していることも歴然としている。本来なら、それら全てを網羅した上で、古代山城出土瓦の様相に言及すべきであるが、筆者にはその力量が不足している。遺憾ながら、本章では、各山城の初期古瓦に関する系譜・特徴等について、他遺跡の出土例との比較から考察を加えることとしたい。

これまでの出土状況から、大野城跡では主城原地区を中心に、かえり弁軒丸瓦（020A型式）と鎬弁軒丸瓦（032、033型式）、そしてそのいずれかと組み合う無文軒平瓦と想定される厚手の軒平瓦が出土し、基肄城跡では大野城跡とは別種のかえり弁軒丸瓦、いわゆる百済系単弁軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が出土している。鞠智城跡では、大野城跡の鎬弁軒丸瓦に類似する文様の有稜素弁軒丸瓦と、その上部に被され、広端部が周縁を成す丸瓦が出土しているが、明確な軒平瓦の存在は確認されていない。いずれの城跡の資料も数量が限定的で、且つ、建物からの落下状況を如実に示す資料には恵まれていないため、建物における瓦葺の様相は判然としていないと言えよう。

大野城・基肄城は、憶礼福留、四比福夫という百済達率の指導によって築かれたことが明らかである。土塁線・石垣線による縄張りの特徴、土塁の版築や石垣の積み方、門の構造など、国内のそれ以前に相当する遺跡と隔絶したこれらの技術が、その記録の証左となっている。鞠智城もまた、築城記録こそないものの、類似する縄張り、土塁構造の他、八角形建物跡や貯水池跡の検出、朝鮮半島系銅製菩薩の出土から同様の体制下で築城されたと

考えられる。屋瓦についても、朝鮮半島からの影響が想定されよう。

(1) かえり弁軒丸瓦

基肄城跡で見られるかえり弁軒丸瓦は、その瓦当文様の系譜について、小田富士雄氏による詳細な研究により（小田 1966・1975）、百済の瓦当に祖型が求められることが広く周知されている。いわゆる百済系単弁軒丸瓦である。祖型となる百済の瓦は益山王宮里から出土した図 7-1 で、蓮弁の中房側が丸く膨らむ一方、弁端方向へ向かつては一度凹みながら端部で反転隆起している。反転する弁端は、中央に稜線が入りその両側が凹む形状で、その特徴が九州の百済系単弁の弁形と共通することから、モデルとして考えられているものである。類似する文様として、蓮子の数こそ違うが百済金剛寺跡から出土した瓦当もあり（図 7-2）、基肄城跡出土瓦の祖型を百済系文様に置くことは、多くの研究者が支持するところである。

また小田氏は、この瓦が、直接朝鮮半島からもたらされたわけではなく、軒丸瓦周縁に多重圈線を採用すること、組み合う軒平瓦が三重弧文軒平瓦であることの特性から、我が国の畿内地方を經由し、日本流の変容をした上で、九州へ伝わったものと論じている。周縁の圈線は大和坂田寺跡、三重弧文軒平瓦は大和川原寺跡の瓦より影響を受けたものと示唆している（小田 1995）。瓦当文様のにも、坂田寺跡の単弁軒丸瓦の中でも、中房の大きな 5D 型式八葉蓮華文軒丸瓦（図 7-3）からの影響が想定される（亀田 2006）。百済系単弁軒丸瓦は、肥前や豊前の古代寺院に広く拡散・普及するが、その起点となる存在が基肄城の瓦で、天智 4 年の築城記事を年代根拠としている。出土状況からの証明はされていないが、築城期の屋瓦である可能性は極めて高いものと思われる。

一方、大野城跡で出土するⅡ類・Ⅲ類という 2 種のかえり弁軒丸瓦については、やはり弁端の部分的な反転から、百済系の要素を持つと考えられているが、その祖型と言える瓦については明らかになっていない。小田氏は「やや異種の百済系」で「祖型についても複数の資料をたどらねばならない」としている（小田 1995）。Ⅱ・Ⅲ類ともに、基肄城タイプの百済系単弁瓦と比べて、弁端の反転様相や周縁重圈線は類似するが、中房は大型ではない。さらに、最大の特徴として、蓮弁一枚一枚が独立し、中房と接していない点が挙げられる。蓮弁幅の広いⅡ類は、弁形状が隅丸三角形となり、幅の狭いⅢ類は楕円形の弁形状を呈している。

蓮弁と中房の未接続である例を検討してみると、国内における例では、やはり大和坂田寺跡の 5B 型式とされる七葉素弁蓮華文軒丸瓦が挙げられよう（図 7-4）。蓮弁の中房側端部が沈降して、小型の中房から独立している。弁端は反転隆起し、そのスタイルもやや狭長ながら大野城跡で出土したⅢ類（図 3-3）との共通性を感じさせる。周縁は単圈線により装飾されている。

一方で、大野城Ⅱ類（図 3-2）に見られる幅広の、ギターピック風の蓮弁形は、坂田寺跡例とは若干様相を異にしているともとれる。視点を朝鮮半島の瓦当文様に転じ推察してみると、蓮弁と中房の遊離という点からは、まず高句麗の蓮蕾文瓦当文様が想起されるが、アーモンド様の隆起や半球状の中房などの特徴から、文様としての類似性は希薄に思える。そこで百済の軒丸瓦を通覧すると、千房遺跡出土の八葉素弁蓮華文軒丸瓦（図 7-5）が、中房から独立した蓮弁を有する瓦当文様として、注視される（韓国水資源公社・

公州大学校博物館 1996)。平坦な中房は 1 + 8 の蓮子を持ち、卵型の蓮弁の周囲を断面三角の間弁が区画線として変形しつつ取り巻き、中房と蓮弁を隔離している。弁端は反転突起で、凹みつつ反転するⅡ・Ⅲ類とは異なっている点である。千房遺跡は、忠清南道保寧市に立地する遺跡で、瓦窯跡及び寺院跡とされる。百済の都であった公州や扶余の西にあり、そう遠くない位置関係にあることから、百済中枢との関係性もあったと考えられよう。大野城跡のかえり弁軒丸瓦の祖型をいずれに求めるかは、簡単には解答が出せる間いではないが、特異な蓮弁形状を手掛かりに、可能性を有する一つの実例としてこの軒丸瓦当を提示しておきたい。

(2) 鎬弁軒丸瓦

蓮弁中央に一筋の鎬を持つ軒丸瓦で、大野城跡出土のⅠ類(033 型式)及び鞠智城跡出土の軒丸瓦が該当する。両者は、瓦当文様の類似や同じ古代山城での出土という共通点から、以前より関連性が指摘され(島津 1983・金田 1997 他)、主に大野城跡 033 型式が先行、鞠智城跡が後出するものと見做されている。大宰府 032 型式も同系統の文様を持つ軒丸瓦である(図 2-4)。大野城跡出土の 032 型式では、ほぼ文様判別ができないが、大宰府政庁跡で出土が見られるものからすると(図 7-6)、蓮弁の有軸・弁端反転・T 字状間弁の中房到達などの特徴から 033 型式とよく類似するが、1 + 4 の蓮子を持つ小径中房にやや違いが見られる。周縁は瓦範を外した後に、粘土紐で形成されている(栗原 1998)。

これらの瓦当文様については、その祖型を百済に求める見解(小田 1987 他)、新羅に求める見解(金誠亀 1995・栗原 1998 他)の双方が見られている。

小田富士雄氏は、鞠智城跡出土の瓦当に関して、「高句麗に起源して百済を経由したタイプ」で、国内での類例を大和豊浦寺跡出土の 2 類軒丸瓦(図 7-7)に求め、飛鳥地方の瓦を経由しているとした(小田 2012)。基肄城跡出土の瓦同様に、中央政権の関与を想定している。

日本における古新羅系軒丸瓦を分析した金誠亀氏は、三国時代新羅の素弁形軒丸瓦の特徴を、①素文尖形型式、②稜角円形型式、③稜線円形型式、④稜線反転型式、⑤内曲稜線反転型式の 5 種に型式化し、新羅と日本における出土例を通観した。その中で、032 型式・033 型式は④稜線反転型式にグルーピングされている(金誠亀 1995)。金誠亀氏の論考発表時には、鞠智城跡の軒丸瓦は小片出土の状況であったが、⑤内曲稜線反転型式に包含される形で言及されている。なお、蓮弁の有軸・稜線が古新羅系の特徴であることから、豊浦寺跡の瓦を焼成した隼上がり窯跡の瓦(豊浦寺 1 類)も、④に分類され新羅系とされている。

大宰府史跡出土屋瓦の新羅的要素を研究した栗原和彦氏は、大宰府 030・032・033 型式について、新羅において親縁性を有する軒丸瓦が出土していることを根拠に、新羅系として位置づけた。大宰府への導入は、統一新羅となり我が国との外交関係が好転した天武・持統朝と推測している(栗原 2001)。大宰府 030 型式は、大野城跡からの出土こそ見られないが、栗原氏が 033 型式などと同様に「鎬弁」として位置付ける有稜六葉素弁軒丸瓦である(図 7-8)。幅広の六葉素弁文様は、新羅瓦の典型的なモチーフで、百済・高句麗には見られないタイプと言えよう。蓮子が 1 + 7 + 12 と 3 重配置になることから、

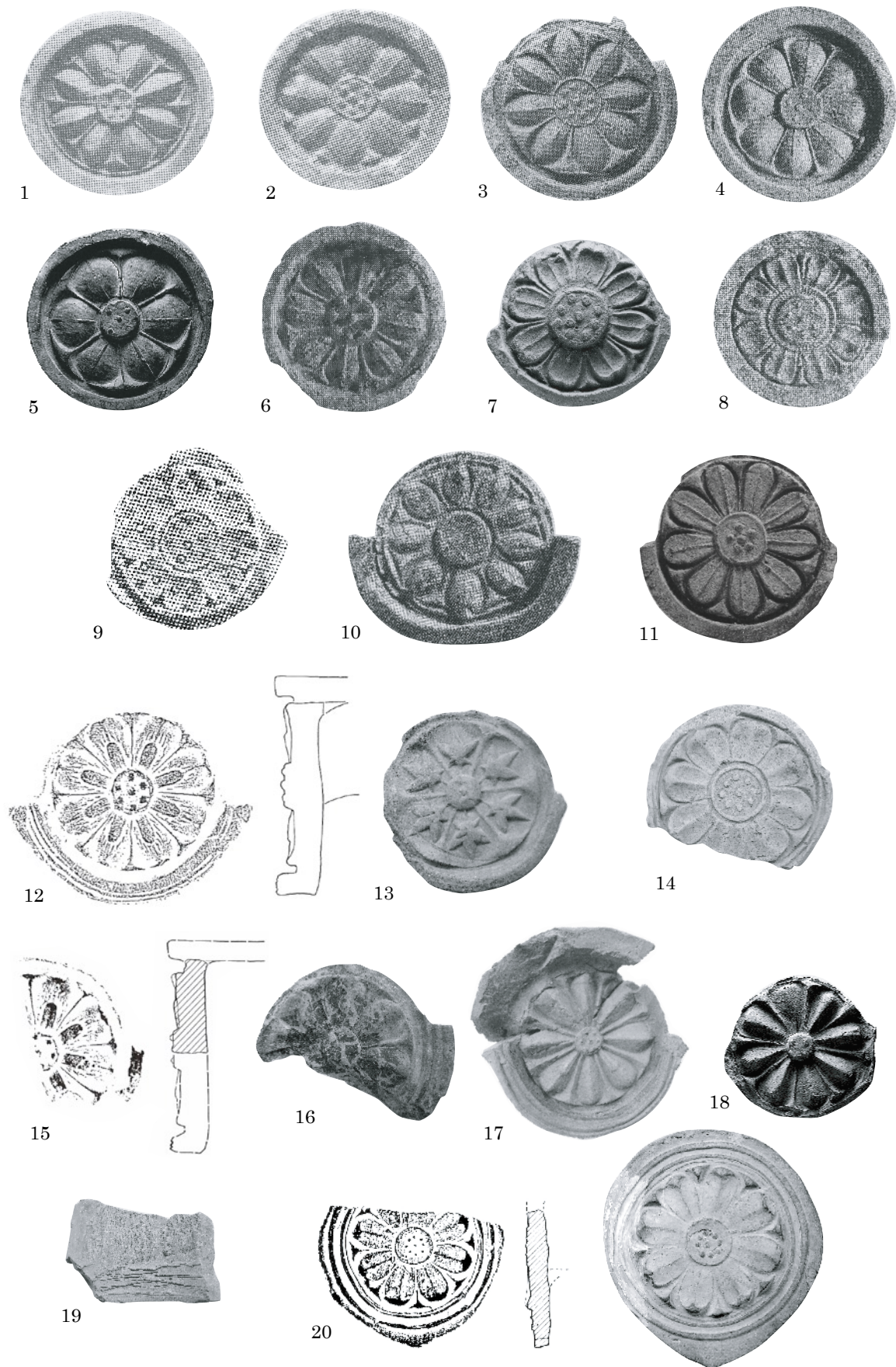


図8 各地遺跡の関連瓦 (縮尺任意)

大宰府初期屋瓦の中でも、やや新しい要素が感じられる。この瓦は接合技法が特徴的であり、周縁を持たない瓦当に、丸瓦を被せる形で接合し、上半部周縁を丸瓦広端面が担う。033 型式や鞠智城軒丸瓦とも共通性のある接合技法であり、上述千房遺跡の接合がこの方式である。030 型式と 033 型式の技法的差異は下半部周縁の有無のみである。

筆者もまた、鞠智城跡の瓦当文様に新羅系の要素があることを述べたことがあるが（中山 2005・2008）、果たして、これらの鎬弁軒丸瓦の祖型はどこに求められるか、筆者なりに検討してみたい。

新羅において蓮弁に鎬を施す軒丸瓦が、6 世紀後半に盛行したことは、金誠亀氏の研究以外に、新羅系屋瓦を集成した国立慶州博物館による『新羅瓦塼』の内容からも理解される（慶州博物館 2000）。近年、その盛行の遡源を辿った清水昭博氏の研究により、高句麗よりむしろ中国南朝の屋瓦を源流とすることが判明してきた（清水 2007）。図 8－1、8－2 が南朝の八葉素弁軒丸瓦で、蓮弁の鎬や中房まで達する間弁などの表現からは、確かに新羅瓦（図 8－3、8－4）への影響が見てとれよう。その基本スタイルは新羅で成立した六葉蓮華文軒丸瓦（図 8－5）にも適用され、大宰府 030 型式のごとく我が国へ伝わった。このような南朝系の系譜に乗る皇龍寺跡出土の図 8－6 等が大野城跡出土の 032・033 型式の直接のモデルになるように思われる。032・033 型式は、このような観点から、中国南朝から新羅へ伝わった文様が、我が国に招来したものと見たい。

また、鞠智城跡出土例は、大野城跡 033 型式が文様的に祖型になると見てきたが、中房まで貫通しない間弁や蓮弁の匙面風の反転等に差異も見られる。この手の蓮弁の凹みを有する軒丸瓦は、金誠亀氏による分類では内曲稜線反転型式とされ、新羅の王宮に関わる月城出土の図 8－7、殿廊跡出土の図 8－8 などが見られる。033 型式からの文様変化の可能性もあるが、鞠智城例の祖型として、このような新羅瓦の影響が強くあったのかもしれない。後述するが、この種の軒丸瓦は安芸備後地方周辺の寺院で見られている。

鎬弁軒丸瓦の祖型に関わる今一つ重要な視点は、百済系軒丸瓦同様に畿内を経由して九州の古代山城に伝播したか、あるいは朝鮮半島からの直伝か、という問題である。

3 瓦当周縁と軒丸瓦接合技法から見られる半島直伝の可能性

本稿で対象とした瓦のうち、基肄城跡出土のかえり弁軒丸瓦と三重弧文軒平瓦のセットは、畿内を経由してもたらされたと考えられ、筆者も異論はない。しかし、鎬弁軒丸瓦の一群については、朝鮮半島から直接的に伝えられた可能性があると考えている。大野城跡 032 型式、同 033 型式、鞠智城跡軒丸瓦は、それぞれ特異な瓦当周縁と接合技法を有しており、畿内の造瓦体制との接点が見出し難いからである。

（1）周縁部の形成と接合技法

032 型式（図 3－4・7－6）の周縁は、粘土紐成形によるため、著しく均整さを欠く。033 型式（図 3－1）は下半部のみ突出する周縁を持つが、これも粘土紐によるため幅が不均等で、軒丸瓦の正面観も左右非対称となり、いびつである。以上の状況から、周縁まで含まない范型であることがわかる。周縁の圈線まで范型に含まれて成形される、かえり弁軒丸瓦群と好対照といえる。洗練された製作法とは言えず、造瓦技術への習熟不足がうかがえよう。接合技法は 032 型式は、周縁背後で丸瓦と接合されるようであるが、033

型式は上半部に丸瓦が被される方式となる。この接合方法は、鞠智城跡の接合技法と共通し、図3－6の接合キズを持つ丸瓦が接合される。しかし、丸瓦の接合キズが凹面広端部ギリギリに見られることから、実際に組み合わさった際に軒丸瓦の周縁は下半分のみが突出してしまうことになる。その本質的な姿は、瓦当に付属した下半部の周縁と丸瓦の広端面が担う上半部がピッタリ合わさり、軒丸瓦の円形周縁となるはずであるが（図8－12断面参照）、033型式の形状では、不格好にならざるを得ない。鞠智城跡の軒丸瓦は、同様の接合技法であるが、丸瓦の接合キズは、丸瓦広端面から数cmほど狭端側に奥まる場所に配されるものが多く、瓦当上半部は瓦当より突出することになる。一方、瓦当に付属する周縁下半部は、033型式のように突出せず瓦当面より引いて作られる。手づくねによる突出周縁の成形を断念したかのような印象を受ける。033型式、鞠智城瓦ともに、本来のあるべき姿に到達できなかったと理解できる。

以上のような観察状況から見ると、032型式や033型式を手掛けたのはあまり瓦作りに精通していない工人ということになろう。瓦範の提供と特定接合技法の教示を受けた工人が、見様見真似で製作した可能性が高い。畿内を経由することで、範型成形による装飾周縁や安定した接合技法を会得しているかえり弁造瓦工人とは別の、素人に近い集団が担当したものと推測される。

（2）接合技法の類例

筆者はかつて鞠智城跡の軒丸瓦接合技法を「丸瓦被せ式技法」と表現したことがあるが（中山2005）、百済の軒丸瓦の接合技法を検討した戸田有二氏はこの種の接合技法を「公山城技法Ⅰ」と設定している（戸田2004・2006）。曰く「瓦当下半部のみ周縁部をつけた瓦当円板に男瓦（筆者註：丸瓦）を接合する方法で、男瓦先端部がそのまま瓦当上半部の周縁となるもの」で、百済公山城の他、扶余の寺院である金剛寺跡や軍守里寺跡や窺岩面外里遺跡（図8－9）等の出土瓦に採用されていることが知られる。一方で、百済のみならず、新羅においても見られる接合技法であることは、慶州月城出土瓦から判明する（図8－10・8－11）。朝鮮半島の三国時代屋瓦においては、主流とは言えないまでも、通有に存在する技法であったと考えられよう。なお、図8－11は豊浦寺跡・隼上がり窯跡の高句麗百済系軒丸瓦と、周縁にこそ差があるが、瓦当面は同文様である。

この技法を採用した瓦は、国内では、畿内よりも安芸地方の7世紀中葉の古代寺院に多く類例がある。安芸国では、広島県三原市の横見廃寺、安芸高田市の明官地廃寺、正敷殿廃寺などの瓦が知られている（妹尾1999）。横見廃寺では、図8－12の山田寺式単子葉軒丸瓦、図8－13の忍冬文軒丸瓦が、公山城技法Ⅰによって作られている。山田寺式軒丸瓦は、横見廃寺の創建瓦とされ、奈良県明日香村の檜隈寺・呉原寺の瓦と同範関係にあり、範傷の進行状況から、大和から安芸に範が持ち込まれた可能性が指摘されている（妹尾2005）。檜隈寺などの大和の瓦は瓦当裏面上部に、弧状の接合段を設けて丸瓦を接合する手法で公山城技法Ⅰではない。このため、範の移動のみが行われ、技術的な伝播はなかったとされている。接合技法は、朝鮮半島からの渡来系技術と考えられる。なお横見廃寺では図8－14の八葉素弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、接合技法は異なるが、鞠智城跡の瓦当と文様の相似がつとに指摘されているものである（鶴嶋1981・中山2005）。

明官地廃寺の出土例は、横見廃寺・檜隈寺と同範の図8－15、同タイプで子葉に綾杉

文を彫り加えた図 8 - 16、小さな中房と狭長な有稜蓮弁が特徴的な八葉素弁軒丸瓦などがある。この八葉素弁軒丸瓦の 4 弁分に山田寺式風の子葉を付加した図 8 - 17 のような素弁単弁混成軒丸瓦も出土している。これらの素弁系軒丸瓦は図 8 - 18 の月城出土八葉素弁軒丸瓦に瓜二つで、新羅瓦がモデルと判断できよう。明官地廃寺の軒丸瓦は全て公山城技法 I で接合されており、図 8 - 19 等の瓦当が脱落した丸瓦も出土しており、鞠智城跡の状況とよく似ている。周縁は、図 8 - 17 で見られるように下半部のみ重圈線で、上半部には圈線が見られない素文縁となる事例が多く見られる。これは、下半部周縁分のみを彫出している瓦範であったか、丸瓦の広端部が接合時には乾燥していて、瓦範の周縁圈線が範出できなかったか、いずれかの可能性があるだろう。丸瓦側端部と瓦当下半周縁端部の接着部は、補強粘土を多く撫で付け、着脱しにくいような工夫が施されている。

これらの寺院で、朝鮮半島系接合技術が利用されている理由について、妹尾周三氏は明官地廃寺の創建に新羅系瓦工が関与したと想定している（妹尾 1999）。明官地廃寺から東へ約 15km 離れた三次市には、白村江の役への参加者が百済僧弘済を連れ帰って、創建したという寺町廃寺があり、百済系瓦当や鞠智城例に極めてよく似た新羅系の八葉素弁軒丸瓦（図 8 - 20）が出土している。接合技術が公山城技法 I でないことから、直接の繋がりは見い出せないが、安芸備後に、渡来人が集住する契機となったのかもしれない。朝鮮式山城と同じく、百済との相関を示す記録がある遺跡に、新羅系文様の軒丸瓦が出土する点は興味深い。

畿内の瓦範を利用しつつも、接合技法は朝鮮半島系技法を用いた横見廃寺や明官地廃寺など安芸の白鳳期寺院の造瓦体制は、大野城跡や鞠智城跡の造瓦体制と親近性を有している。安芸と北部九州に直接的な交流があったことは証明できないが、同時期に類似する系統の渡来系瓦工が関与して、在地の瓦造りが展開されたものと理解できる。工人の有する技術的特徴は、仏師等単独工人が製作する瓦範の様相以上に、集団全体の技術工程に関わる接合技法に色濃く見られるはずだからである。

これらの事例から瓦工集団は、貴重な瓦範を大事にしつつ、固有の造瓦技術を駆使して、その周囲に造瓦法を伝達するケースが往々にしてあると見られる。その視点からすると、大野城跡の 2 つの鎬蓮弁のうち、033 型式を製作したグループが、鞠智城跡の軒丸瓦製作に異動あるいは指導等の形で関与したことが想定される。接合技法のうち、公山城技法 I のみの単独継承が最大の根拠であるが、鞠智城では、丸瓦接合位置の狭端側への移動や瓦当周縁形成の簡素化（放棄？）という一定の工夫を行っている点で後出要素が見られるからである。

4 まとめ

主に検討対象とした大野城跡・基肄城跡・鞠智城跡の初期瓦を整理し、①基肄城跡のかえり弁軒丸瓦は従来どおりに、畿内を経由した百済系であること、②大野城跡の 020 型式のかえり弁軒丸瓦は基肄城とは別系統の百済系の可能性があること、③ 032・033 型式の鎬弁軒丸瓦は新羅系（稜線反転型）で、畿内を経由しない朝鮮半島直伝の可能性が高いこと、④鞠智城の鎬弁軒丸瓦は、文様がやはり新羅系（内曲稜線反転型）で、接合技法から大野城跡 033 型式を製作した瓦工集団が二次的に関与した可能性が高いこと、などの点について考察した。

古代山城の築城には、百済高官の指導が注視されるのは当然ながら、事業進捗に当たっては膨大な人的リソースが投入され、様々なテクノクラートが関与したと思われる。不適切な表現であることを承知の上で、現代風に換言すれば「前例のない国発注の公共事業で、受注者は外資系も含む JV」というイメージであろうか。各部門の請負者には、ノウハウのある者が方々から集められ、特に渡来系の技術者は重宝されたであろう。また、築城後の維持管理・改修の中で、新たな渡来人を工事に充てることもあったかもしれない。

瓦の様相から見る古代山城は、必ずしも「百済一色」には彩られていないように思われる。本稿は、山城を構成する要素の全てが百済方式であるわけではなく、広大な山城が多様性の集合体であることを再認識する一助にはなったであろうか。

冒頭で示したように、少数のごく限られた資料によったため、脆弱な論旨であることは否めない。数点の資料の出土によって、古代山城の瓦の様相は劇的に変化する可能性も大いにあり、その際には、本稿は的外れな内容になるであろう。今後の古代山城調査の進展と関連諸学の研究深化により、そうなることを期待したい。

最後になるが、本稿の発表機会を与えていただき、数々の教示をいただいた歴史公園鞠智城・温故創生館の木村龍生氏はじめ、九州歴史資料館の小澤佳憲氏、広島県埋蔵文化財センターの伊藤実氏、安芸高田市歴史博物館の古川恵子氏・秋元哲治氏にご教示ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

挿図出典：

図 2－左・中＝温故創生館 2015、右＝熊本県教委 2012

図 3－1・2・3（写真共）・4（写真共）・5（写真共）・6（写真共）＝福岡県教委 1979、

1 写真・2 写真＝九州歴史資料館編 2015、7（写真共）・8・9＝福岡県教委 1991、

10（写真共）＝福岡県教委 2010、11＝九州歴史資料館編 2015

図 4－1～6＝基山町教委 1977、7～13＝小田 2011a（実測図筆者トレース）

図 5・図 6＝中山 2008（鞠智城跡各報告書図面をトレース・接合部は筆者実測・写真筆者撮影）

図 7－1・2＝忠南大学校百済研究所編 1976、3＝京都国立博物館 1990、4＝奈文研飛鳥藤原宮発掘調査部 1992、5＝韓国水資源公社・公州大学校博物館 1996、6（写真共）＝栗原和彦 1998、

7＝国立慶州博物館 2000、8＝高橋 1983、8 写真＝栗原 1998

図 8－1・2＝清水・奥野 2007、3～8・10・11・18＝国立慶州博物館 2000、

9＝忠南大学校百済研究所編 1976、12＝妹尾 1999、13・14・16・17・19＝筆者撮影、

15＝吉田町教委 1985、20＝三次市 1982、20 写真＝広島県立歴史民俗資料館 1998

参考・引用文献：

赤司善彦 2014「古代山城の倉庫群の形成について－大野城を中心に－」『東アジア古文化論攷 2』

高倉洋彰編 中国書店

井形進 2003「大宰府式鬼瓦小考」『九州歴史資料館 研究論集』28 九州歴史資料館

瓜生秀文 2001「伝怡土城の出土の鬼瓦」『溝瀆』第 9・10 合併号 古代山城研究会

岡山県文化財保護協会 2013『史跡 鬼城山 2』

小田富士雄 1966「百済系単弁軒丸瓦考・その 1」『史淵』第 95 輯（1977『九州考古学研究 歴史時代篇』学生社 所収）

- 小田富士雄 1975「百済系単弁軒丸瓦考・その2」『九州文化史研究紀要』第20号（1977『九州考古学研究 歴史時代篇』学生社 所収）
- 小田富士雄 1987「西海道の新羅・百済系古瓦塼」『大宰府と新羅・百済の文化』（1990『九州考古学研究 文化交渉篇』学生社 所収）
- 小田富士雄 1993「熊本県鞠智城をめぐる諸問題」『潮見浩先生退官記念論文集 考古論集』（2013『古代九州と東アジアⅡ』同成社 所収）
- 小田富士雄 1995「日韓古瓦塼文化の交渉研究（二） 三 北部九州の朝鮮系古瓦塼」『青丘学術論集』第7集 韓国文化研究振興財団
- 小田富士雄 2006「豊前の古代瓦の諸問題」『行橋市史・資料編（原始・古代）』（2013『古代九州と東アジアⅡ』同成社 所収）
- 小田富士雄 2011a「一二 基肄城跡（古代・中世）」『基山町史 資料編』基山町史編さん委員会・基山町史編集委員会編 基山町
- 小田富士雄 2011b「老司式軒瓦の再検討」『古文化談叢』第66集（2013『古代九州と東アジアⅡ』同成社 所収）
- 小田富士雄 2012「第1節 鞠智城の創建をめぐる検討」『鞠智城跡Ⅱ ―鞠智城跡第8～第32次調査報告―』熊本県教育委員会
- 鏡山猛 1937「怡土城趾の調査」『日本古文化研究所報告』6 日本古文化研究所
- 金田一精 1997「文様・技法からみた肥後の古瓦」『肥後考古』第10号 肥後考古学会
- 亀田修一 1981「百済瓦当考」『百済研究』12 忠南大学校百済研究所
- 亀田修一 1983「古代瓦塼より見た大宰府と朝鮮」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館
- 亀田修一 1993「百済の瓦・新羅の瓦」『佛教藝術』209号 毎日新聞社
- 亀田修一 1995「日韓古瓦塼文化の交渉研究（二） 二 吉備の朝鮮系瓦」『青丘学術論集』第7集 韓国文化研究振興財団
- 亀田修一 2000「百済系軒丸瓦の製作技法」『古代瓦研究Ⅰ ―飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで―』奈良国立文化財研究所
- 亀田修一 2006『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
- 韓国水資源公社・公州大学校博物館 1996『保寧市水没地域発掘調査報告書① 千房遺蹟』
- 基肄城築造 1350年事業実行委員会 2015『基肄城築造 1350年記念シンポジウム 基肄城を考える ―基肄城とは何か― 発表資料集』
- 基山町教育委員会 1977『特別史跡 基肄城』
- 九州歴史資料館 2009『水城跡 ―下巻―』
- 九州歴史資料館 2011『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ ―日吉地区―』
- 九州歴史資料館編 1981『九州古瓦図録』
- 九州歴史資料館編 2002『大宰府政庁跡』吉川弘文館
- 九州歴史資料館編 2015『大野城築造一三五〇年記念 九州歴史資料館移転開館五周年記念 特別展「四王寺山の一三五〇年 ―大野城から祈りの山へ―』
- 京都国立博物館 1990『畿内と東国の瓦』真陽社
- 金誠亀 1995「日韓古瓦塼文化の交渉研究（一） 一 古代日本の新羅系軒丸瓦について」『青丘学術論集』第6集 韓国文化研究振興財団
- 熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡Ⅱ ―鞠智城跡第8～第32次調査報告―』

- 熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館 2015『古代山城紹介パンフレット 発見☆古代山城』
- 栗原和彦 1998「大宰府史跡出土の軒丸瓦 ー編年試案への模索ー」『九州歴史資料館 研究論集』23 九州歴史資料館
- 栗原和彦 2001「大宰府出土瓦に見られる朝鮮半島統一新羅時代文化の影響」『九州歴史資料館 研究論集』26 九州歴史資料館
- 栗原和彦編 2000「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦 型式一覧」九州歴史資料館
- 国立慶州博物館 2000『新羅瓦磚』
- 古代瓦研究会編 2000『古代瓦研究Ⅰ ー飛鳥寺の創建から百済大寺の成立までー』奈良国立文化財研究所
- 古代瓦研究会編 2005『古代瓦研究Ⅱ ー山田寺式軒瓦の成立と展開ー』奈良文化財研究所
- 齋部麻矢 1999「北部九州の飛鳥・白鳳時代の瓦」『飛鳥・白鳳の瓦と土器 ー年代論ー』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会
- 齋部麻矢 2010「11ー5 出土瓦について」『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県教育委員会
- 島津義昭 1983「鞠智城についての一考察」『大宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館
- 清水昭博 2007「古新羅瓦の遡源に関する検討 ー有軸素弁蓮華文軒丸瓦を中心としてー」『王権と武器と信仰』同成社
- 清水昭博・奥田尚 2007「中国南朝の屋瓦」『朝鮮古代研究』第8号 朝鮮古代研究刊行会
- 妹尾周三 1999「六 広島 of 古瓦」『考古学から見た地域文化 ー瀬戸内の歴史復元ー』溪水社
- 妹尾周三 2005「安芸の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ ー山田寺式軒瓦の成立と展開ー』奈良文化財研究所
- 総社市教育委員会 2005『古代山城鬼ノ城』
- 総社市教育委員会 2006『古代山城鬼ノ城2』
- 高橋章 1983「大宰府の小型瓦」『古代研究』25・26 元興寺文化財研究所
- 高橋章 2007「附1「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧の追加資料について」『観世音寺 ー遺物編2ー』九州歴史資料館
- 高松市教育委員会 2003『史跡天然記念物屋島 ー史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰー』
- 忠南大学校百済研究所編 1976『百済の古瓦』学生社
- 鶴嶋俊彦 1981「72. 鞠智城跡」『九州古瓦図録』九州歴史資料館編
- 天理大学附属天理参考館 2004『古代新羅の屋瓦』天理大学出版部
- 戸田有二 2004「百済の鎧瓦製作技法について（Ⅱ）ー熊津・泗沘時代における公山城技法・西穴寺技法・千房技法の鎧瓦ー」『百済研究』40 忠南大学校百済研究所
- 戸田有二 2006a「百済における鎧瓦の三技法について」『国士舘大学文学部人文学会紀要』第36号 国士舘大学文学部人文学会
- 戸田有二 2006b「百済泗沘時代における造瓦集団の一端 ー鎧瓦製作技法から見た造瓦集団の一端ー」『百済 泗沘時期文化の再照明』国立扶餘文化財研究所
- 中山圭 2005「鞠智城出土の軒丸瓦 ー朝鮮式山城の一樣相ー」『九州考古学』第80号 九州考古学会
- 中山圭 2008「鞠智城の瓦」『古代東アジアの瓦』韓国瓦学会
- 奈良文化財研究所 2010『古代東アジアの造瓦技術』
- 奈良文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部 1992『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』

- 西住欣一郎 1999 「発掘から見た鞠智城」『先史学・考古学論究Ⅲ』龍田考古会
- 花谷浩 1993 「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』第40巻2号
- 比嘉えりか 2007 「統一新羅と日本の蓮華唐草文軒丸瓦 ―いわゆる新羅系古瓦の再検討にむけて―」
『七隈史学』第8号 七隈史学会
- 比嘉えりか 2008a 「初期瓦研究の現状と課題 ―筑前地域を中心に―」『七隈史学』第9号 七隈史学会
- 比嘉えりか 2008b 「新羅の瓦」『考古学ジャーナル』No.576 ニュー・サイエンス社
- 広島県教育委員会 1972 『安芸横見廃寺の調査Ⅰ』
- 広島県教育委員会 1973 『安芸横見廃寺の調査Ⅱ』
- 広島県教育委員会 1974 『安芸横見廃寺の調査Ⅲ』
- 広島県埋蔵文化財センター 1987 『明官地廃寺跡 ―第1次発掘調査概報―』
- 広島県埋蔵文化財センター 1988 『明官地廃寺跡 ―第2次発掘調査概報―』
- 広島県埋蔵文化財センター 1989 『明官地廃寺跡 ―第3次発掘調査概報―』
- 広島県埋蔵文化財調査センター 1990 『明官地廃寺跡 ―第4次発掘調査概報―』
- 広島県埋蔵文化財調査センター 1991 『明官地廃寺跡 ―第5次発掘調査概報―』
- 広島県立歴史民俗資料館 1998 『平成10年度考古企画展 ひろしまの古代寺院 寺町廃寺と水切り瓦』
- 福岡県教育委員会 1976 『特別史跡 大野城Ⅰ』
- 福岡県教育委員会 1977 『特別史跡 大野城Ⅱ』
- 福岡県教育委員会 1979 『特別史跡 大野城Ⅲ』
- 福岡県教育委員会 1980 『特別史跡 大野城Ⅳ』
- 福岡県教育委員会 1982 『特別史跡 大野城Ⅴ』
- 福岡県教育委員会 1983 『特別史跡 大野城Ⅵ』
- 福岡県教育委員会 1991 『特別史跡 大野城Ⅶ』
- 福岡県教育委員会 2010 『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』
- 藤澤和夫 1961 「日鮮古代屋瓦の系譜」『世界美術全集』第2巻（2004『朝鮮古代研究』第5号 朝鮮古代研究刊行会 所収）
- 前原市教育委員会 2006 『国指定史跡 怡土城跡』
- 三次市教育委員会 1980 『備後寺町廃寺 ―推定三谷寺跡第1次発掘調査概報―』
- 三次市教育委員会 1981 『備後寺町廃寺 ―推定三谷寺跡第2次発掘調査概報―』
- 三次市教育委員会 1982 『備後寺町廃寺 ―推定三谷寺跡第3次発掘調査概報―』
- 向井一雄 2014 「鞠智城の変遷」『鞠智城跡Ⅱ ―論考編2―』熊本県教育委員会編
- 森郁夫 1990 「瓦当文様に見る古新羅の要素」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 矢野裕介 2012 「(3) 瓦について」『鞠智城跡Ⅱ ―鞠智城跡第8～第32次調査報告―』熊本県教育委員会
- 吉田町教育委員会 1985 『明官地廃寺跡 試掘調査概要』